ネモチの葉を１、２枚指先で揉んですりつぶすと、ベッタリと糊の感触が残ります。両方は仲間同士で、葉の大きさ、実の大きさが多少異なります。

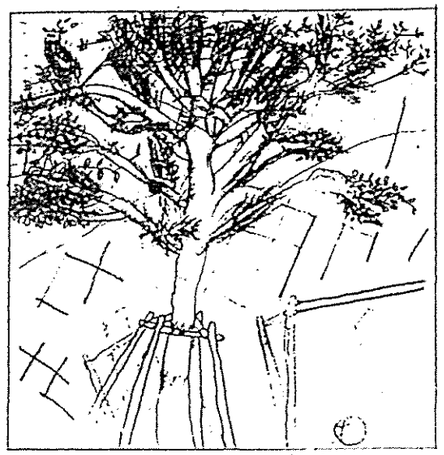
庭木として一般的なのはクロガネモチの方だと思っていますが、それは「金持ち」にイメージが重なるから。でも本当は、日射しを浴びた葉や幹が黒鉄色に輝くからなのです。鯉のいる池の側にも１本あります。

秋、赤く熟した小粒の実が花が咲いたように壮観です。

モチノキも１本、飼育舎脇の畑の隅に植えられています。

学校便り　９月号　（６・９・２）

ニレ



（画）斉藤　歩

本校の校歌でご存じのように、ウルムスが学名、英語でエルムです。

学校前の道を飾る街路樹がこの並木ですが、学校の運動場、山側の鉄棒脇に１本立っています。校歌、校章のイメージからしても、本校の象徴となるべき樹といえるかも知れません。

外の場所のことで恐縮ですが、子ども植物園（南区六ツ川）のアキニレの樹には驚きました。

この樹としては大木です。よく葉を繁らせた自分の木陰の中に、直径３０センチほどの幹がエメラルドグリーンの妖しい光を、、、グリム童話の赤ずきんの森はこんな色をしていたのかも知れない、と思ったりして。　と、言うわけで、それがこの樹の本当の姿だと思うのですが、この樹の周りには、大きな円状にツツジが植え込んであって、誰も近づけないようになっているのです。

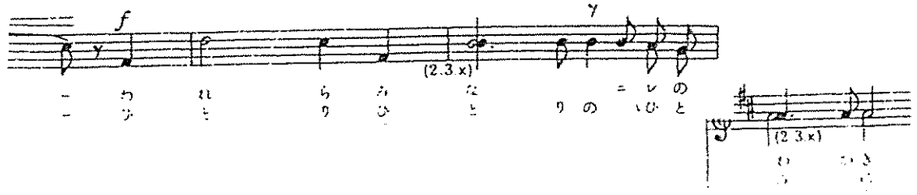
灰褐色の樹皮に緑色の粉を吹くのが特徴で、しかも、鱗のように小さく割れて、簡単に剥ぐことができるのを防ぐためだろうと思います。学校の樹も並木も樹皮は剥がれています。

小さな葉の鋸歯（縁に鋸の刃のようなきざみがある）も際立ち、春の若葉も夏の緑も、秋の鮮やかな紅葉もよし。小枝が多いので葉の落ちた冬のシルエットよし。四季折々に美しい樹です。

アイヌ神話では祖アイヌックルの母はハルニレだったり、北欧の伝説では、

人類最初の女性エンブラがニレの生まれ変わりだったりと、女性に見立てられているお話が多いようです。

ずっと昔、樹皮の繊維で布を織ったり、内皮を挽いて食用にしたり、さまざまな器を作ったりと、暮らしを彩り暮らしを支えていた樹木だったことが、美しくも偉大なる女性のイメージと重なったのではないでしょうか。



ケヤキ

運動場の山側には、アキニレ、イチョウ、ケヤキが並んでいるのですが、中は飛ばして次回に回します。と、言うのは、ケヤキがニレ科に属しているからです。

鋸歯をもつ葉の様子はよく似ています。

ニレの葉に比べると、大きくて細長い感じですが。

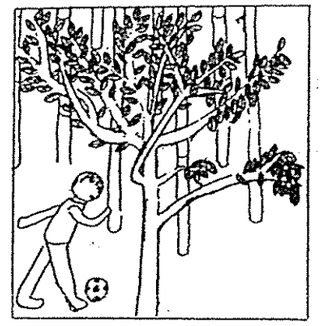
名前の由来は「けやけき木」、ひときわ目立つという意味の古語。

樹齢千年なんていうのは別にしても、冬の真っ赤な夕焼けを背に、スックと立った巨大な竹箒のようなこの樹を見ると、正に、けやけき木。

木目の美しさを生かした家具調度など、日本の生活文化に欠かせない樹木だと思います。

学校のは、、ン、、樹形が、、ちっともケヤキらしくない、、。

でも大丈夫。まちがいなくケヤキだと、植木屋さんの太鼓判です。



（画）田村良造

学校便り　１０月号　（６・10・１）

イチョウ

蝶々のはね、魚のしっぽ、、、落ち葉を使った造形あそびになくてはならな